

# 殿様の中堀めぐり

城郭研究室が所蔵する史料の中に鍵町の「御用日記」（以下「日記」）があります。鍵町は姫路城野里門のすぐ北側に隣接する町で、幕末には紅粉屋事件があったところです。この日記は天保11～12年と13年の2冊だけのもので、作成したのは同町で商業を営んでいた大原（志方屋）惣五郎と考えられます。内容は姫路町の年寄の日誌的なもので、本来大原氏は町年寄になれる家柄ではなかったものの、鍵町の名家である原家当主が幼少のため後見として実質的に町年寄となり、姫路町の仕事に関わったようです。3年分しかないのは、たまたま3年分しか残らなかったのか、あるいは、原家当主の後見が3年ほどだったからかもしれません（11年については10月から）。

「日記」の内容は大方がルーチンワーク的なものですが、時々興味深い記事が書かれています。本号ではそのうちのいくつかを紹介します。

「日記」には、何時誰が御用場に出勤したかが書かれていて、そこには国府寺、三木、内海、芥田、本庄、那波といった名前が見えます。彼らは姫路町を代表する有力者で、国府寺のように中世以来の家柄を誇る旧家もあります。この「日記」では全体的な記述のなかでも明確に記している事項が、町政に直接関係する役人の氏名とその月番です。その月の藩側責任担当者が誰かわからなければ事務は滞ります。御用場から奉行宅へ出頭することや行事によっては奉行に同道することもあったので、月番と担当役人の氏名の確認は不可欠です。

次に目に付く記事は、興業に関するものです。とくに坂本町で行われている万歳芸に対する検断が頻繁に出ていて、検断のたびに御用場から町年寄が役人に同道しています。

坂本町は西国街道に面した町ですが、町に北接する中堀の浚渫土を街道上に盛ったため、人馬の通行に難が生じ通行量が激減し、一本南の筋の俵町から福中町が東西のメインストリートに「昇格」してしまいました（「姫路府誌」、「姫路市史」第14巻）。坂本町は人を呼び戻すために興業をうちました。万歳芸もその一つと思われます。「日記」にはたびたび検断が出てきますので、常設の小屋があったのかもしれませんが（「日記」を含む文書群の中に「坂元町定小屋一件」という明治13年の綴りもあって、城南校で定小屋請負委員の選出が行われています）。しかし、町の盛衰は変わらず、現在でも二階町の方が大きなアーケード街になっているのはその名残といえます。「日記」ではほかに、亀井町の勸進能、白銀町の相撲、橋元新町の万歳芸に対しても検断を行ったことが記されています。

この年、藩主酒井忠学は在国とみえて、その動きも記されています。殿様の外出が記されるのは、出発や帰城の際、町年寄たちが出迎える必要があったためと考えてよいでしょう。殿様の通行する経路上の各町にとっては事前に掃除などが必要となります。藩の担当役人との間で相互に連絡を取りあい、確実な情報を入手しておいたのでしょう。ただし、町年寄の方も月番制のため、筆者が番に当たっている月は詳しい記載が目立つので、この「日記」に殿様の動きが網羅されているということにはならないものの、そこからいくつか動きを拾い上げてみます。

- a；正月朔日 惣社参詣
- b；3月2・3日 外側廻り…車門→柿山伏→小姓町→坊主町→野里門
- c；3月7日 伊伝居鉄砲場
- d；3月9日 飾磨津  
町役人は中ノ門で出迎えるものの、殿様帰城は二階町→元塩町→久長町→鍵町→野里門
- e；4月10日 西光寺野視察…久長門→竹門→西光寺野、帰りは加古川（舟）→京口門

aはいわゆる初詣ででしょう。姫路町からもそれに付き添った町年寄がいたかもしれません。殿様の動きは中曲輪の内、すなわち武家地だけでほぼ完結するので、彼の軌跡については「日記」に詳しく記されていません。

bになると、2日間かけて城の西から北を巡回しています。柿山伏や小姓町は一応城下の範囲に含まれるものの、城から見れば西に偏する場所にある、低禄の家臣もしくは組屋敷のエリアです。さらにその一週間後は飾磨津へ赴き、そこで船備をさせています。その帰途、殿様はわざわざ中曲輪の東を廻って野里門から城へ帰っています。中ノ門で出迎える町年寄にとっては肩透かしというところでしょうか。これで殿様は一週間かけて姫路城の中堀をほぼ一周したことになります。

ちなみに、前年の2月26日に火之御番小野田七郎兵衛が城下の見廻りを行っています（彼は翌年町奉行に名を連ねています）。そのコースは以下の通りです。

清水門→（川端）→吉田町→農人町→米田町→博労町→相生町→福中門→坂本町→元塩町→平野町→大黒町→下久長町→米屋町→鍛冶町→河間町→鍵町→野里門

ほぼ西国街道～但馬街道に沿った町々の巡回をしています。その一週間前の19日には竹田町でボヤ騒動が起きていますので、役目として小野田には実況見分と再発防止のために、町々を巡回する責任があったのかもしれませんが。この月の番は「此方」すなわち大原氏だったため、詳しく巡回経路が書かれていると考えてよいでしょう。

dでは、殿様は西光寺野（さいこうじの）へ出かけています。西光寺野は現在、姫路市の北東部の船津（ふなづ）になります。市川左岸の河岸段丘上にあるため、本格的に開発が始まるのは文化年間で河合寸翁によるとい

われています（『日本歴史地名大系 兵庫県の名』）。しかし、地理的要因のためなのかこの開発は失敗に終わったようで、この地域に農地が広がるのは大正時代を待たなくてはなりません（『姫路市史』）。ところがこの「日記」には3月16日に「西二階町柴屋十兵衛が西光寺野普請に取り掛った」旨の記事があり、この日、殿様はこの普請を視察に行った可能性はあります。橋本政次氏は、忠学時代は前代にひきつづいて新田開発などが盛んに行われていたと記しています（『姫路城史』）。

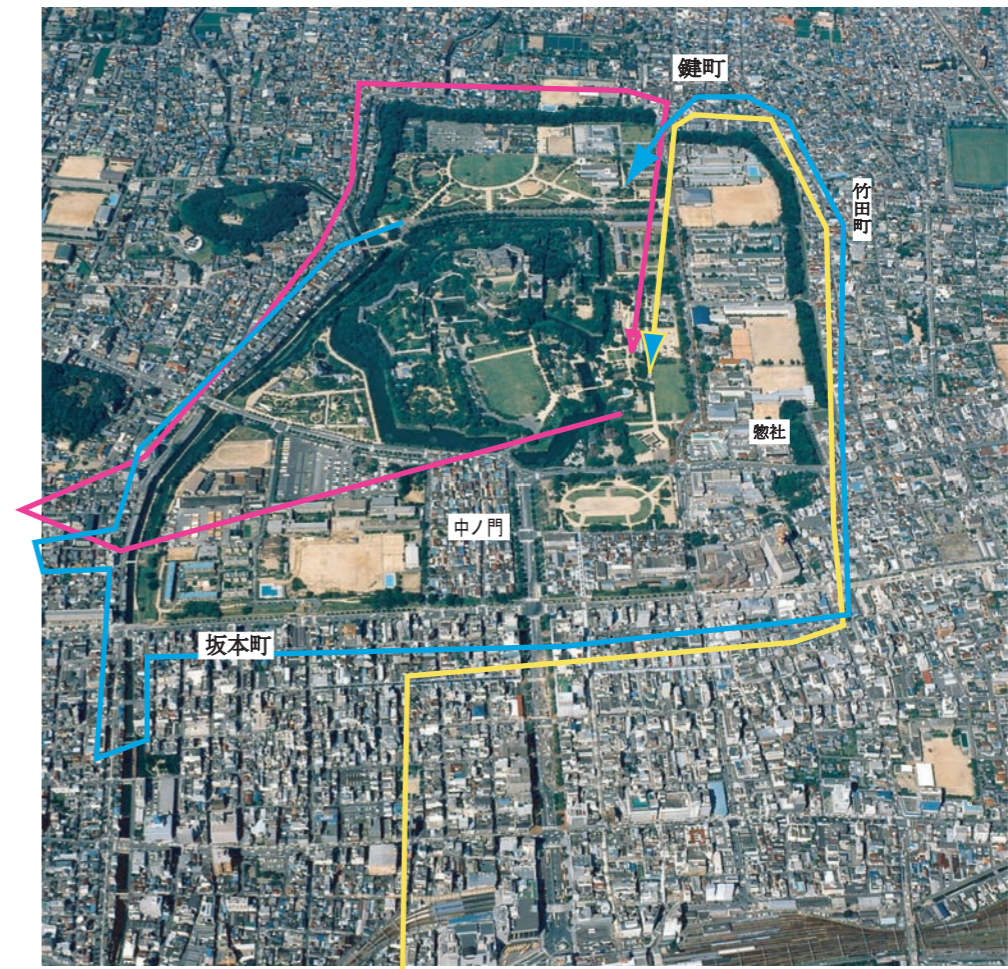
西光寺野からの帰途は往路とは異なり、加古川筋を通って、西国街道を経由して京口門から姫路に入ったと記されています。何故わざわざ西光寺野から加古川筋に出たのか明記されていません。天保10年9月に加古川筋で大きな水害が起きているので、それに関わる視察だったのかもしれませんが、詳細はわかりません。

ところで、姫路城に関する城や城下の絵図のなかには町人を含む武家以外の者が製作したものがあります。例えば「本多中務大輔忠國公御時代御城内外惣家中侍之家名惣町中共之絵図」（元禄11；兵庫県立歴史博物館蔵）には普請方小役人から借りて惣社の社家が書写したことが明記されています。また「姫路城下町絵図」（大久保敏郎氏蔵）はもともと那波家が所蔵していた城下図で、姫路城下周辺の村々の情報までも記入されています（「日記」にも市之郷村で火災が起きたことが御用場に伝えられたことが記されています。このときは町方の事ではないとして消火などに人を遣わすことなどの対処は避けていますが、城下に隣接する村での出来事は何らかの形で即時的に伝えられるようになっていたことがわかります）。さらに家中については本紙に本多家中の名が記され、その上に張紙をして榊原家中の名を記しています。もともと本多時代の城下図として作成されましたが、本多と榊原の交替にあわせて張紙による訂正が加えられたものと見られます。

この2図に共通するのは、とくに「本多中務大輔忠國公御時代御城内外惣家中侍之家名惣町中共之絵図」という名が示すように、家中と町名が明記されているということです。鍵町の「日記」を読んでいると、とくに町年寄にとってはこうした城下絵図は必要不可欠だったとさえ思えてきます。那波家に詳細な城下図が所蔵されていた理由も理解できるというものです。侍以外の者たちが、こうした城下図を所持する理由について「武士との付き合いもあったため」（平良哲夫氏による）との見方は的を射ているかもしれませんが、よくよく冷静に考えてみれば、城下町の実質的な治安や行政は各町の「自治」に任されていたわけですから、そうした町の役人こそ、こうした城下絵図を必要に応じて所持していたとしても不思議ではないですし、先祖代々城下に居住し、町政に携わる町年寄のほうが、「鉢植え」の大名に比べて実務的な情報を掲載した絵図や帳面を所持していたことでしょう。

それにしても、殿様が遠回りをして中曲輪の屋敷へ帰るのはどうしてなのか、この「日記」には記されていません。帰城の際の方位に吉凶でもあったのでしょうか。

調べなくてはならないことは、尽きません。



姫路城跡空撮写真（上がほぼ北）

